

海外と結ぶオンライン書道の実践と課題

—タイ人日本語学習者を対象とした取組から—

林朝子* シューショートケオ・サランヤー**

Issues and Practices of Calligraphy Online Lesson Connected with Overseas
—Based on Efforts for Thai Japanese Language Learners—

Asako HAYASHI, Saranya CHOOCHOTKAEW

要 旨

オンラインで日本とタイを結び、タイの大学で日本語を専門に学ぶタイ人学生を対象に書道実践を行った。本稿では実践の報告と共に、実践に関わったタイ側教員2名、日本側教員1名の気づき、学生のアンケート回答と書字漢字を基に考察し、海外に向けたオンライン書道における効果と課題を明らかにした。教室設置の大画面を学生全員で視聴することによる情報の共有と紙媒体での資料配布が、学生の毛筆練習において効果が見られた。一方、課題としては、教員側からは実践に必要な書道具の準備、また、練習に取り組む学生の様子をオンライン画面で把握することの難しさが挙げられた。学生側からは書道経験のほとんど無い者を対象とした場合の平面的なオンライン画面使用による指導方法の改善が挙げられた。

キーワード: 書道 オンライン 海外 日本語学習者 書道経験

1. はじめに

本稿では、非漢字圏のタイ人日本語学習者を対象に行ったオンラインによる書道実践を取り上げ、オンラインにおける書道活動や交流の効果と課題を提示していく。本実践の書道活動はタイの大学の日本語専攻科目「現代の日本伝統文化」の一部に位置付けられており、授業担当のタイ人教員（以下、T教員）と日本からオンラインで書道指導を行う教員（以下、N教員）との連携で実施された。授業の履修学生は全員がタイ語を母語とする日本語専攻の学生（以下では、学生と記す）であるが、書道の経験はほぼ無いに等しい。

本実践は、書道経験がほとんど無い学生に、筆・墨・紙を使い、文字表現を行う書道文化を体験させることだけでなく、小学校中学校国語科書写の視点¹⁾を取り入れ、毛筆で漢字を書くことを通し、学生が点画の書き方や字形の捉え方を確かめ、硬筆書字の際にも応用することを目標とした活動である。筆者は2008年度よりこの活動を継続しており、従来は学生と対面しての実践であったが、2020年度は感染症拡大のため国内外

での移動が制限され、日本とタイをオンラインで結んでの実践となった。オンラインの特徴は、インターネット回線や必要な機器類等の環境を整えば、場所を問わず、コミュニケーションを行うことが可能であり、様々な交流や活動に有効的な点である。しかし、本実践に携わった教員の気づき、また、参加学生のアンケート結果と書字漢字から、書道経験がほとんどない学生を対象に、使い慣れていない筆を使用し身体を使って文字表現を行う書道活動をオンラインで行う場合の課題も明らかとなった。以下では、本実践の報告と共に、海外の日本語学習者を対象としたオンライン書道の課題を明らかにしていく。

2. 先行研究と本実践の位置づけ

2.1 日本語学習者を対象とした書道実践

国内外の日本語学習者を対象とした書道実践は、短期あるいは短時間の体験型も含めると、ある程度の数が行われていると思われるが、論文等での報告は少なく、確認できる実践は数が限られている。

* 三重大学教育学部

** チュラーロンコーン大学文学部

高濱 (1996) では、日本研究を行っている米国の高等教育機関 (169 機関) の内 18 機関で、書道に関する内容が「講義」として開講されている状況が報告されている。また、その教育目的として、「A: 言語教育との関連」「B: 芸術文化の教育との関連」「C: 異文化理解教育との関連」の 3 点があるとし、「A: 言語教育との関連」では「書写技能の修得」と「文字の正否・良否・適否を認識できる弁別能力の修得」が目指されており、本実践と同様に、小中学校書写における毛筆指導の位置づけに通じる視点と言える。

福光 (2005, 2020) は、日本の大学において日本語学習者を対象に、半年から 1 年という長期開講授業の実践を行っている。長期にわたる指導が可能であり、授業目標は小中学校書写の指導内容から最終的には書道の芸術性にまで展開されている。授業実践を基に、日本語学習者を対象とした教材を開発しており、本実践でも指導法を参考にしている²⁾。

馬場 (2019, 2021) も日本の大学において日本語学習者を対象に、書道の実践を行っている。馬場 (2019) では、漢字語彙に関する授業の一部で筆ペンを使用し、学習者の関心を書道へ向けている。また、馬場 (2021) では、日本文化理解の一環として、書道実践を通して文字が芸術へと昇華したことを学習者が体験的に学ぶことを目指している。

田畑 (2013) では、日本語未学習のドイツ人高校生を対象に「日本文化としての書道の体験学習」を実施している。実践内容を書道の文字性と造形性の点から分析を行い、「日本語の学習としてではない、直截に書道を理解する手助けになる」とし、文字性だけに捉われない書道のあり方を提示している。

林 (2008, 2010, 2011) はタイ人日本語学習者を対象に、筆ペン、毛筆を使用した実践を取り上げている。筆ペン、毛筆による書字体験を日本語の文字を整えて書くことに生かすことを目指した実践である。不慣れた筆記具であり、点画を書く際に運筆を意識しなければならぬ筆ペン・毛筆を使用することで漢字の点画への理解が高まることが明らかになった。また、練習課題や自身の書字文字を大きな字で見ることで、字形や配置にも意識が向けられていることも明示できた。また、林 (2017) では、国内の大学における日本語学習者・留学生を対象に書道実践を行った。漢字の意味を理解している場合でも、点画や字形といった文字性を意識しつつ、造形性にも意識が働く可能性を指摘した。

2.2 オンラインによる書道実践

オンラインによる書道実践としては、国内の大学で教員養成課程学生を対象に行った、富山 (2020)、廣瀬 (2020) が挙げられる。富山 (2020) は 15 回の授業の

内 7 回をオンラインで実施し、学生の「IT 環境に配慮し、大学のポータルサイトを用いた資料配布型」を採用している。オンラインで毛筆実技を行ったのは 7 回中 2 回であるが、授業時のカメラ使用による毛筆指導や動画配信は行わず、資料の文章と図による指導を行っている。学生へのアンケート結果から、「実技指導に資する動画教材の作成」の必要性を導いている。また、廣瀬 (2020) では書道に関する複数の授業でのオンライン使用から見えた課題を挙げている。実技指導ではカメラを通して実際に書く様子を画面に映し出しており、「初心者の書写指導では、Zoom による音声と実際に書いて見せる映像投影でも充分対応できるが、高度な筆使いを扱う場合は、その技法は画面だけでは伝わりにくい」としている。

富山 (2020)、廣瀬 (2020) はオンライン時にも実際に書く様子を見せることの必要性を指摘しているが、実践対象は日本人学生であり、少なくとも小中学校において国語科書写を学び、毛筆使用経験者である点が本実践との大きな違いである。例えば、富山 (2020) が配布資料の文章例として、横画指導では「筆の穂先をびんびんにして、半紙に対して垂直に立てる。穂先から半紙に約 45 度 (左上方) の角度で筆圧を加えて押さえ、一旦止める。」という説明文を上げている。書道経験がほぼ無いに等しい日本語学習者の場合、毛筆の筆記具としての感触や運筆を表す様々な用語の実際的な意味を理解することが難しく、当然であるが、日本語学習者へ説明をする際には、どのような形で具体的に伝えるのが重要となる。

3. 実践内容

2020 年の感染症拡大のため、海外との行き来が困難になり、2019 年 9 月にはオンライン実施が確定した。その後、実施日に至るまで、双方の教員でメールと SNS を使用し、実施への準備や実施方法の検討を行った。

準備期間：2020 年 12 月～2021 年 3 月

実施日時：2021 年 4 月 5 日 (月)

タイ時間 9:30～12:30

実施方法：zoom 使用によるオンライン

教材等：紙媒体による資料

教員体制：タイ側 2 名 (T 教員、支援教員)

日本側 1 名 (N 教員)

参加者：タイ国チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語専攻「現代の日本伝統文化」履修生 41 名 (3 年生 15 名、4 年生 16 名、5 年生³⁾ 10 名)

実践目標：漢字の成り立ちを踏まえ、毛筆による漢字表現を楽しむ

- 実践内容：15分 準備
 15分 文字（漢字）の歴史・書道の紹介・姿勢や筆の持ち方などの説明
 50分 楷書練習「下・水・紅花・調和」
 10分 休憩
 25分 行書練習「紅花・調和」
 25分 好きな漢字を楷書／行書で書く
 10分 押印（消しゴム印使用）
 30分 片付け
 アンケート回答（Google forms 使用）

実践時には、大教室に学生が集まり、大きなスクリーンに投影されたN教員の映像を見ながら、練習を行った。学生への直接的な指導はT教員と支援教員に委ねる形となった。練習課題等の資料は印刷したものを学生に配布した。N教員は、PC内臓カメラと外付けカメラを使用した。外付けカメラは手元を上から映すために用いた。

学生の書道経験については、41名中15名が「書道経験あり」と回答しているが、全て、短期間あるいは短時間の書道活動であり、継続して書道を学習している者はいなかった。参加者への目標では「毛筆による漢字表現を楽しむ」と伝えているが、各練習の中で点画・字形・配置など硬筆書字に生かせる観点を取り上げ、それらの観点を意識して練習ができるように工夫を行った。日本語学習者書字の漢字には、字形を支える要素⁴⁾の視点から十分な漢字を書字できていない場合が多く、本実践でも書字の際に字形を支える要素を強く意識する必要のある楷書での練習時間を多く取り、小中学校書写の教科書を参考に練習課題を作成した。「毛筆による漢字表現」の広がりを経験してもらうことも考え、行書練習も取り上げた。



教室の様子1



教室の様子2

4. 実践から見た効果と課題

ここでは、タイ側・日本側の教員の気づき、学生のアンケート回答の内容と書字漢字を基に、本実践から見た効果と課題について述べる。

4.1 本実践から見た効果

まず、本実践を通して効果があった点を取り上げる。

1点目として、大きなスクリーンへの投影である。オンライン授業の場合、各自のPC画面を使用することが多いが、教室に設置されているスクリーンを使用した。学生が大きなスクリーンで運筆を確認することができた。また、個別活動が中心となる毛筆練習にかかわらず、皆が同じ情報を共有することができ、取り組む課題の練習方法などを学生同士で話し合いながら進めている様子が見られた。

また、2点目として資料の配布が挙げられる。オンラインの場合、配布資料は基本的に紙媒体での配布ではなくデータで配布されPC画面上で確認することが多いが、本実践ではデータ配布だけでなく、紙資料も配



学生の様子1（資料の配置）

布した。その結果、練習用紙である半紙の横に資料を置き、同じ面に置かれている資料をよく観察しながら練習が行われていた。携帯の画面で資料を見ている学生がいたが、その学生の書く漢字と比較すると、紙資料で練習を行っている学生の漢字のほうが点画が安定し、形の整え方へも十分意識が向けられていた。この効果については更に詳細な調査が必要であるが、同じ平面上での視点移動の有効性が考えられる。

4.2 本実践から見えた課題

課題については、教員側から見えた課題と学生側から見えた課題に分けて取り上げる。

4.2.1 教員側から見えた課題

1) 実践準備

本実践では使用する書道用具をタイ国内で準備することとした。N 教員が対面で実施していた際には、書道用具を事前に郵送したり、実践時に持参したりして対応していた。しかし、今回は、オンラインによる書道実践を行う将来的な可能性を視野にいれ、タイ国内で用具を揃えることを行った。硯、下敷、文鎮については、タイの大学で保管されている使用可能なものがあり、購入が必要なものは筆、墨液、半紙であった。タイ国内で書道用具を扱っている店舗は稀少であり、扱っていたとしても非常に高価となる場合が多いため、今回は T 教員がネットを使用し、予算内で筆・墨・半紙を購入した。特に購入が困難だったのは筆である。T 教員は書道を長期的に学んでおり、筆に関する知識も十分に持ち合わせているが、ネット上での説明では実際に使用した際の筆の弾力や筆管の持ちやすさなどが分からず、N 教員とも相談し、最終的に 2 本を取り寄せ、実際に墨で書き比べ、購入する筆を選ぶ必要があった。墨、半紙、硯などは、基本的な使用を目的とするのであれば、ネット購入もそれほど困難はないが、筆の場合は運筆や点画の線質にも大きな影響が出るため、ネット購入では慎重を期することが重要であり、試用も行うことが望ましい。

2) 学生の様子の把握

今回、各学生は zoom に入っておらず、N 教員は教室全体の様子は見ることはできたが、個々の学生の様子を見ながら授業を進めることができなかった。そのため、N 教員の筆の動きを見、口頭説明を聞き、どの程度理解しているのかを把握することが非常に難しかった。途中から、zoom で学生の文字や書いている様子が確認できるよう、学生の手元を T 教員が手持ち PC で映すようにした。また、支援教員が携帯で写真を撮り、SNS で N 教員に送り、学生の書字の様子が分かるように対応した。それらの動画や画像を基に、N 教員が全体に FB を行うなど、学生の進捗状況に合わせて指導を行う

ことができた。今回、タイ側に 2 名の教員がいたため、個別に学生の情報を日本側でも得ることができたが、全学生の個々の書字の様子や書字漢字を把握することは十分にはできなかった。各学生が PC を設置し、zoom に入り、随時書字漢字を画面で確認することも検討が必要であろう。

また、各学生の書字に向かう姿勢や執筆の様子を把握することも非常に難しいと感じた。例えば、姿勢、机との距離、筆の傾きなど、対面で実施している場合にはすぐに気づくことであっても、オンラインの場合は全く気がつくことができない。タイ側教員は姿勢や筆の傾きについて気づいた場合も、N 教員の進行に合わせて指導するタイミングを取るのが難しく、指導できないことも多かった。

オンラインでは見えない・見えにくい部分については、事前に双方で確認をし、進行時の声掛けのタイミングや内容についても打ち合わせを行っておくことで、双方の教員が適時によりよい指導ができると考えられる。



学生の様子 2 (執筆、筆の傾き、姿勢)

4.2.2 学生側から見えた課題

学生のアンケート回答、書字された漢字から見えた課題を取り上げる。

アンケートで「漢字を書く時、一番注意したものを、形・線・大きさから一つ選んでください」という質問に対しての回答は、線：27 名、形：10 名、大きさ 4 名であった（アンケートでは学生が理解しやすいように、点画ではなく「線」という表現を用いた。本稿では「線」を点画と同等の意味で使用する。）。毛筆で大きな文字を書く場合、最初に注目されるのは「形」が多いが、今回は「線」という回答が多かった。また、「ペンやシャープペンシルで書く時と筆で書く時と、どのような点が違ったか」という質問への自由記述では「筆のコントロールがしにくい／難しい」が 11 名、「筆の太さの調節が難しい／に気をつける」3 名と、筆の扱いに困難を感じている記述が見られた。さらに、点画の書き方

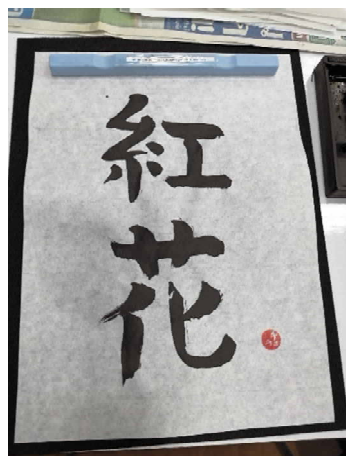
で難しかったところとして、6名が「止め方」を具体的に挙げていた。

「線」に注意を向けている学生が多くいる一方で「コントロールがしにくい／難しい」「太さの調節が難しい／に気をつける」という回答が目立つ背景には、4.2.1-2)で触れた「筆の傾き」の影響が窺われる。筆を垂直に、または、垂直に近い形で維持することで、筆の根元の鋒（毛の部分）の弾力を生かすことができ、筆圧を使いながらの書字が可能となる。しかし、学生書字の漢字を見ると、点画の始筆から終筆にかけて筆の傾きの影響が大きく出ていることがわかる。例えば、学生Aの場合、「黄」4画目・「昏」3画目の横画の終筆を書く



学生Aの書字

際には筆の筆管が右手の甲のほうへ倒れ、力を加えられないまま、鋒の部分が紙に接し、そして、筆管が倒れたまま筆を抜いている様子が見える。学生Bの場合は、「紅」4画目・「花」5画目の縦画で、学生Aと同様に筆管が右へ倒れ、鋒に力が入らないまま紙に接し、そのまま終筆で筆を抜いている。筆管が倒れたまま、鋒の部分が紙に接している状態では、点画を書くために筆を動かそうとしても、力が入っていないため、鋒が紙に張り付いてしまう状態となり、学生のコメントに多く見られた「コントロールがしにくい／難しい」状態となっていたと考えられる。



学生Bの書字

学生への指導では、口頭で「筆はまっすぐ立てる、倒さない」ことを伝えながら、カメラに向かって実際に手で筆を持ち、画面で学生が確認できるよう提示した。PC内臓カメラ、外付けカメラを使用し、外付けカメラでは点画の運筆が見えるよう上から手元を映すようにした。しかし、画面で見た場合、筆が垂直になっているのか倒れているのかを明確に把握することが非常に難しく、筆を垂直に立てることへの意識を持続することも難しかったので

あろう。筆という筆記具を使用したことがほとんどない学生には、平面的な画面から「筆を立てる」という感覚を得にくく、その結果、筆圧を体験し、点画を書くことに生かすことも十分にできなかったと推測できる。

5. まとめ

今回の実践で見えたオンライン書道における効果と課題は、タイ側に教員2名が待機していたことによる場所が大きい。準備の段階からタイ側教員が中心となり、実践時にはタイ側教員が学生への直接的対応をしており、日本側からの映像も学生の視点から確認を行い、また、学生の書字の様子もその場で把握することが可能であった。その結果、オンライン書道実践における効果と課題の具体的な点を明らかにすることができた。本実践から見えた効果と課題は、国内外を結ぶオンライン書道において活用できる指導の観点であり、オンライン書道実践の可能性を高め、今後の書道文化の広がりにも寄与できよう。

今後は、今回明示された課題、特にオンラインの画面上での指導方法について、日本語学習者を始めとした書道経験のない対象者に対し、実際にどのような映像を用い、そして、口頭説明を行うことが有効的であるのかについて実践的な検討を行っていきたい。

謝辞

本実践の実施、本稿執筆において、チューラーロンコン大学文学部非常勤講師の池谷清美先生から甚大にご協力とご教示をいただきました。深謝いたします。

注

- 1)小中学校の書写において毛筆と硬筆の関連は「毛筆を使用した学習は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導すること」と学習指導要領に明記されている。様々な点画を毛筆で学習することで理解がしやすくなり、また、大きく書くことで字形の整え方への理解も深まるとされている。
- 2)大阪外国語大学留学生日本語教育センター(2004)『留学生のための書道〈入門編〉』
- 3)「5年生」とは3~4年次に日本へ1年間留学していた学生である。
- 4)全国大学書写書道教育学会編『新編書写指導』萱原書房(2006)で「字形を支える要素」として「点画」「全体の整え方」「点画の組み合わせ」「部分の組み立て方」が挙げられている。林(2010)では、これらの要素から見たタイ人学習者の硬筆文字の問題点について取り上げている。

引用文献

全国大学書写書道教育学会編(2020)『国語科書写の理論と実践』萱原書房

- 高濱武周 (1996) 「非漢字文化圏における「書」の教育目的ー
アメリカ合衆国についての一考察ー」『書写書道教育研究』
第 11 号、pp.76-89
- 田畑理恵 (2013) 「書道の表現における外国人留学生の文字性
と造形性の捉え方」『書写書道教育研究』第 28 号、pp.44-
49
- 富山敦史 「教員養成課程における毛筆書写実技の指導ー楷書
の技能を向上させる基本ポイントー」『教育研究実践報告誌』
第 4 号第 1 号、pp.9-18
- 馬場裕子 (2019) 「留学生教育コースにおける日本文化理解授
業：日本文化書道実践報告」『日本語・日本文化』第 46 号、
pp.115-128
- 馬場裕子 (2021) 「日本文化としての書道につながる漢字語彙
指導：留学生教育の実践より」『間谷論集』第 15 号、pp.111
-122
- 林朝子 (2008) 「日本語教育書字指導での筆ペン使用の有効性
ータイ人学習者を対象としたパイロット調査からー」『日本
語教育方法研究会誌』vol.15 No.2
- 林朝子 (2010) 「毛筆を生かした漢字指導の試みー“読みやす
い”漢字書字に向けてー」『三重大学教育学部附属教育実践
総合センター紀要』第 30 号、pp.31-37
- 林朝子 (2011) 「文字指導における書道活動ータイ人日本語学
習者への文字群指導を通してー」『国際交流基金バンコク日
本文化センター 日本語教育紀要』第 8 号、pp.85-94
- 林朝子 (2017) 「留学生の書道体験における気づきー書字への
意識と書表現の捉え方ー」『三重大学国際留学生センター紀
要』第 12 号 (通巻第 19 号) pp.127-139
- 廣瀬裕之 (2020) 「Zoom を用いた書写書道に関するオンライ
ン授業の実践ー新型コロナウイルス感染症流行時における
本学での取り組みー」『書写書道教育研究』第 35 号、pp.71
-76